

今月のテーマは「伝統文化」です。日本人が受け継いできたものの一つに命のもとへの感謝があげられます。私たちが生きていくうえで命のもと、それは食物です。そして食物が育つうえで、また人が心身健やかに成長するために欠かせないもの、命のもと「もと」と言えるのが太陽です。太陽を朝に夕に、気づけば畏敬の念を込めて拝し「太陽の人」と呼ばれた人がいました。倫理運動の創始者・丸山敏雄です。

太陽を崇拜したために拷問にまであい、半死半生のひどい目にあつたにもかかわらず、ますます太陽をあがめ尊び、死ぬまで太陽にまごころを捧げたがゆえである。

『丸山敏雄 人と思想』丸山竹秋著

ここに書かれた拷問や半死半生とは不敬罪という罪に問われ、牢獄に入った時期を表します。その不敬罪とは、神宮に鎮座する天照大神と太陽を同一視した神宮不敬という、いわれなき無実の罪でした（紙数に制限があるために、詳細は新刊、高橋徹著『純情に生きる 希代の教育者丸山敏雄』を参照して下さい）。にもかかわらず牢獄から出た後も「太陽の人」であり続けたのです。

昭和二十六年十二月、亡くなる数時間前にも家人に襖をあげさせ、座椅子の中から東天を拝したのでした。さて、丸山敏雄が太陽と同様に重要な誓いをたてる際に拝したのが伊勢神宮（正式名称・神宮）でした。

昔から日本人は尊崇の念と、親しみも込めて「お伊勢さん」と呼び、神宮を詣でてきました。それは現代にも通じ令和元年一



祖先が拝した対象に 尊崇と感謝の念を持つ

年間の参拝者は約九七〇万人、その内一%にあたる約九万六千人は海外の参拝者です。神宮には、仏教の仏典やキリスト教の聖書のような教えは存在せず、参拝者の中には多種多様な価値観、信仰を持つ人がいます。また、企業や団体で参拝・寄付を行なうことから、一宗派をこえた公的性格に近い場であるといえるでしょう。

神宮には内宮と外宮があります。外宮には産業の神であり、五穀の神である豊受大神が祀られています。五穀ということは、総じて命のもと食物の神様ということです。また、神宮のホームページに「内宮は皇室の御祖先であり、太陽にもたとえられる天照大神さまをおまつりし、全国より崇敬を集めています」と書かれているように、内宮に祀られる天照大神は古くから皇室の祖先と考えられ、その象徴を太陽とも捉えてきました。前述したように、自然科学の研究が進んだ現代でも太陽の光と熱がなければ私たちは生きていけません。こうした面から太陽は命のおおもとと言えるのではないのでしょうか。

皇室の祖先とされる天照大神を象徴する太陽、また昔から私たち人間が生きている上で欠かすことのできないエネルギーを注ぎ続けてくれる太陽。私たちの祖先が柏手を打ち拝した対象に、尊崇と感謝の念を持ち、また時には真向かってその心を形に表わしてみたいかがでしょうか。

命の「もと」への感謝を深め、その誇るべき伝統を後世に残していきたいものです。